

否定接頭辞を用いた二重否定表現について

久保圭 (京都大学大学院 人間・環境学研究科)

1. はじめに

「非不器用」, 「非不合格」, 「非不自然」, これらの表現は, ウェブ上には当然のように存在するが, ウェブ以外の文章にはまったくと言ってよいほどあらわれないものである。それはなぜか。

この「非不-」という, 日本語の否定接頭辞を用いた二重否定表現は, 『新潮文庫の100冊 CD-ROM 版 (1995)』においては見つからなかった。このことから, 「非不-」という表現が, ウェブ以外の書きことばにおいては, まったく使用されていないことがわかった。そこで, 「非」と「不」を入れ替えた表現である「不非-」についてもウェブで調べてみたが, 「不非-」と「非不-」の使用頻度には明らかな偏りが確認された。

ここまでの経緯において, 生じる問題は二つある。この偏りを動機付けているものは何かという問題と, なぜこのような表現がウェブ以前の書きことばでは用いられていなかったのかという問題である。

そこで, 本研究では, 日本語の否定接頭辞を用いた二重否定表現「不非-」と「非不-」をめぐる上記の問題について考察する。

今回の発表の目的は, 二重否定表現「不非-」と「非不-」の使用実態について分析し, その傾向を動機付けているものが「不-」と「非-」の用法であることを明らかにすることである。

2. 事例の収集について

本研究の分析に用いたデータの収集方法については, まず, 「不-」と「非-」の事例を, 『新潮文庫の100冊 CD-ROM 版 (1995)』から収集した。

得られた結果は, 「不-」が233例, 「非-」が87例であった (ともにタイプ数)。

次に, 得られた「不-」の事例には「非」を付け, 「非-」の事例には「不」を付けて, それぞれ「非不-」と「不非-」の形にした上で, そのすべてについてウェブ検索¹をおこなった。よって, 本研究で用いる「不非-」と「非不-」に関するデータは, すべてウェブ上から収集したものである。

3. 使用傾向と具体事例

本節では, 前節に述べた方法によって収集した「不非-」と「非不-」の事例を, 具体例を交えながら分析していく。「不非-」と「非不-」の使用の傾向について確認した後, 次節では, その傾向が「不-」と「非-」の用法に動機付けられた結果であることを示す。

以下の表は, 「不非-」と「非不-」の検索結果についてまとめたものである。

表: 「不非-」と「非不-」の検索結果

(※ 小数点第二位以下は切り捨て)

	ヒット事例数	検索事例数	割合(%)
「不非-」	0	87	0%
「非不-」	26	233	9.3%

表からもわかるように, 二重否定表現である「不非-」と「非不-」の使用には大きな偏りがある。

¹ ウェブ検索は, すべて Google を用いておこなった。なお, 検索によって得られたデータから, 中国語で書かれたものと, 自動翻訳による日本語の文章を除外した。

る²。「非不」については、ヒットする事例が一つもなかった。「非不」についても、ヒット事例は総検索事例数の一割弱であるが、これは、当該表現が新規表現であること、そして、使用される文脈が極めて特殊であることなどが、その理由として挙げられる。

3.1 「非不」

表にある通り、「非不」の検索ヒット数は0件であった。本節では、ノイズとしてヒットしたものを参考までに紹介しておく。なお、本節の例文中における下線は、すべて発表者による。

- (1) (CD と圧縮データの音質はどちらが上か、という質問に答えて)

ストアで買った物は基本的に圧縮データですからどんだけがんばっても CD クラスの音質には戻りませんね、要は不 (非) 可逆圧縮と呼ばれるやつです、

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1243156362)

- (2) (小児歯科学の教本の目次から)

不 (非) 協力的な小児の対処法

(https://www.ishiyaku.co.jp/search/details_1.aspx?cid=1&bookcode=427340)

- (3) (例え話のなかで)

例えば『私の考えでは、「教室で私語が満ちること」は、状況が変化するにつれて、現実になったり不非現実になったりするのだと思います。』なら意味が分かるし、きつとこの意味で書いたのだろう。

(同一人物が次の発言内で)

ああ、すみません。×不非現実 ○非現実

(<http://blog.livedoor.jp/dsakai/archives/50619759.html>)

3.2 「非不」

本節では、「非不」について、いくつかの具体例を挙げて分析する。以下に、収集した事例の一部を載せておく。なお、本節の例文中における下線は、すべて発表者による。

- (4) 料理レベル高いから非・不器用だよ。

(<http://mimizun.com/log/2ch/charaneta/1141217527/>)

- (5) (医師国家試験対策について)

みんな非不合格だといひねえ。

(<http://unkar.org/r/doctor/1265561435>)

- (6) (ある漫画のシナリオがわかりにくいという意見に対して)

単行本になったときに初めてシナリオの流れがくっきり見えてくるタイプの漫画だと思ってしますので (実際話の流れとしてはいたって非不自然ですから・・・話飛んでるから分かりにくいところあるけど) 全然気になりません。

(<http://www.ruce.net/database.cgi?tid=report&did=report&keys1=21>)

- (7) (社会空間としての mixi の特徴について)

mixi は個人情報の内容や公開度を操作でき、それによって、非「不特定多数」、つまり特定可能な多数からなる社会空間を形成している。

(<http://www.beatii.jp/seminar/028.html>)

- (8) (「買占め」と「転売」について)

「転売」と言う集団にとって“非”不利益な行為が「買占め」という集団にとっては不利益である行為と混同されるのは私個人として耐え難いことであり、「転売」をなさっている方々に対してかなり失礼な事ではないかと思い、こうしてコメントさせて頂きました。

(<http://ninehalt.blog4.fc2.com/?mode=m&no=461&m2=res&page=1>)

前節で挙げたノイズとは異なり、「非不」という表現を、明らかに二重否定の意味で用いていることが文脈から推測される。用いられている文脈に関する特徴としては、「非不X」という表現の意

² あまりに極端な結果のように思われるが、検索事例の総数を考慮すれば、事例数の不足によって結果の信頼性が失われているということはない。

味するものが読み手に伝わるように、「不 X ではない」と直後に言い換えてみたり、文脈内で「不 X」と対比させる形で用いられることが多いことなどが挙げられる。

3.3 事例から観察される特徴

前節で見た「不非-」と「非不-」の使用傾向と具体事例から観察できることで、なかでも興味深いのは、「非-」が「不 X」という、すでに否定されたものをさらに否定できる（「非不 X」の形をとることで、二重否定をあらわすことができる）のに対して、「不-」は否定されたものをさらに否定することができない（「不非 X」の形で使用することが難しい）ということである。

本研究では、この特徴の背後には日本語の否定接頭辞「不-」と「非-」の用法が関わっていると考える。次節では、この二重否定をめぐる問題について考察する。

4. 事例の考察

本節では、前節で述べた「不非-」と「非不-」の特徴を裏付けるものが「不-」と「非-」の用法に起因するものであると考え、久保 (2010)における「不」と「非」の用法について概観し、それに基づいて考察をおこなう。

4.1 「不-」

久保 (2010)では、「不-」に後続する語基の多くが「肯定的価値」を持つものであることを示し、その基本的意味を「ある状態が望ましい基準まで達していない」であることを提示した。「肯定的価値」とは、我々の価値判断にとって望ましいとされる価値のことを指している。

- (9) 彼は不幸だ。
- (10) 結果は不満なものだった。
- (11) この会社は対応が不誠実だ。
- (12) 彼は不健康な生活を送っている。

例えば、「不満足」という表現においては、「何かに満足すること」が我々にとっては望ましいことであるが、その基準まで達していない状態をあらわしている。よって、「満足」という語には、肯定的な価値が含まれていると考えられる。

4.2 「非-」

久保 (2010)では、「非-」はカテゴリーの否定に関わることを示し、その基本的意味を「ある対象が、該当するカテゴリーに属していない」であることを提示した。その語基は矛盾概念³を持つものである必要がある。つまり、「非-」は「あるカテゴリーに属している／属していない」のみを区別するシンプルな否定の意味を持つ否定接頭辞であり、前節でみた「不-」のように、語基に価値判断に関わる条件を求めない。

- (13) この物質は非金属だ。
- (14) 非会員の方は入室できません。
- (15) 彼は非現実の世界を好む。
- (16) パスタは非日本食でしょう。

例えば、「非金属」という表現において、「非-」によって区分されているのは、「金属である／ない」のいわば「金属カテゴリー」である。「金属であり、金属ではない」ということはあり得ないため、「金属」と「非金属」は互いに矛盾関係にある。

4.3 考察

本節では、前述した「不-」と「非-」の性質を踏まえて、二重否定表現である「不非-」が使用されず、「非不-」が使用されるという傾向の動機付けについて考察する。

4.3.1 なぜ「不非-」が使用されないのか

前述した通り、「不-」は、後続する語基の多く

³ 論理学において、互いに他を否定しあうて、その中間に第三者を入れる余地のない概念。(大辞林)

に肯定的価値がみられる、価値判断に関わる接頭辞である。

よって、「不非X」という表現が用いられるためには、「非X」のあらわすものが肯定的な価値を持っている必要がある。しかしながら、「非X」という表現は、「あるカテゴリーに属していない」という事態のみをあらわすものであるため、その意味は価値判断に関わるものではない。

そのため、「非X」は「不-」に後続することが難しい形式であり、その結果、「不非-」という表現が生じにくいのだと考えられる。

4.3.2 なぜ「非不-」が使用されるのか

前述した通り、「非-」はカテゴリーに関わる否定の意味を持つ接頭辞であり、「不-」とは異なっており、その語基に価値判断の要素を求めない。あるカテゴリーの内と外を区分するだけの機能を持つ、シンプルな否定の様式をあらわしている。

そのため、「非不X」という表現が用いられるために、「不X」が価値判断に関する何らかの要素を持っている必要はない。このことは、「非-」は「不X」を後続させることが比較的容易である理由であると考えられる。

よって、「非不X」は、「不Xというカテゴリーに属していない」という意味で用いることが可能であり、この表現が持つ意味は、二重否定をあらわすものである。

5. おわりに

本研究では、日本語の否定接頭辞を用いた二重否定「不非-」と「非不-」の使用傾向をめぐる問題について考察した。

これらの表現は、否定接頭辞を重ねただけの、一見冗談めいたものにも感じられるが、その使用頻度には、明らかな違いがあった。本研究では、この事実を動機付けとなっているのが、「不-」と「非-」の用法であることを示した。

また、この考察結果は、否定接頭辞を用いた二重否定表現が、動機付けなしに生産されたもので

はなく、基本的な日本語の語彙である「不-」と「非-」の用法に基づいて拡張された新規表現であるということも含意している。

本研究においては、なぜ「不非-」と「非不-」の使用傾向の動機付けについて考察した。しかしながら、ウェブ以外の書きことばでは用いられていなかったこれらの二重否定表現が、なぜウェブ上においては使用されるようになったのかという問題については、今回は扱うことができなかったが、これを今後の課題としたい。

また、今回は扱わなかったが、他の否定接頭辞である「無」「未」なども交えて、より広範囲に二重否定表現について調べることで、否定のメカニズムの解明に迫りたい。

謝辞

本稿の執筆にあたって、黒田航氏、横森大輔氏、土屋智行氏から有益なコメントを頂いた。ここに感謝の意を表する。

参考文献

- 有光奈美 (2006). 日・英語の対比表現と否定のメカニズム — 認知言語学と語用論の接点 京都大学 人間・環境学研究科 博士論文.
- 久保圭 (2010). 日本語の否定接頭辞に関する認知言語学的分析 京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.
- 野村雅昭 (1973). 否定の接頭語『無・不・未・非』の用法 国立国語研究所論集 ことばの研究, 4, 31-50.

コーパス

新潮文庫の100冊 CD-ROM 版 (1995). 新潮社.

連絡先

久保圭 (KUBO, Kay)
京都大学大学院 人間・環境学研究科
antshavenoborder@gmail.com